

「大学入学共通テスト」 第2回プレテスト結果について【国語】

2019年4月4日に第2回プレテストの結果が報告されましたので、今回は、国語の結果の要点について記します。

①マーク式問題は易化したが、平均点はセンター試験より低かった

科目等別の受検者数とマーク式問題の平均得点率等

教科名	科目等名	受検者数(人)	平均得点率(%)	平均点(点)	平均正答率(%)
		3年生の受検者数(人)	3年生の平均得点率(%)	3年生の平均点(点)	
国語(200点)	国語	67,745	45.40	90.81	46.92
		14,677	51.37	102.74	

受検者の多くが2年生だったこともあり、例年のセンター試験より点数は低くなりました。マーク式問題の特徴を以下に挙げます。

- ・第1回プレテストに比べ漢字・語彙などの知識問題が増加した。
- ・第3問には小説ではなく詩とエッセイが出題されたため、本文の字数は例年のセンター試験に比べて大幅に短くなった。
- ・選択肢の長さが全体に短くなった。(センター試験で頻出した3行選択肢が少なくなった。)

こうした点から、第1回プレテストに比べるとマーク式問題は易化したといえます。それでも従来のセンター試験より平均点が低くなった原因としては、記述問題を含めた共通テスト国語全体で時間が足りなかったことなどが考えられます。

②第1回プレテストに比べ記述問題の正答率は上昇した

小問の段階ごとの割合

共通テスト国語の第1問は問1・問2・問3からなる記述問題です。そのうち、問1・問2は第1回プレテストに続いて小問の段階a(完答)の割合が高くなりました。特に問1は75%と難度の低い問題が出題されています。問3は80～120字で解答する難度が高い問題です。第1回プレテストでは問3の小問の段階aの割合は0.7%と低かったのですが、第2回では15%と上昇しました。

その理由としては、

- ・問題が評論読解中心の内容になったことで取り組みやすかった。
- ・解答の条件が記述内容を絞り込めるようなものとなった。

などが考えられます。

一方、問3の小問の段階dは56%と高く、記述量の多い問題への負担の大きさがうかがえます。

問	小問の段階	割合(%)	
問1	a	条件①～③のすべてを満たしている解答	75.7%
	b	条件②、③を満たしている解答(①のみ満たしていない)	0.0%
	c	次のいずれか(①は満たしていても満たしてなくてもよい) 条件②を満たしている解答(③は満たしていない) 条件③を満たしている解答(②は満たしていない)	23.5%
	d	上記以外の解答・無解答	0.8%
問2	a	条件①～③のすべてを満たしている解答	48.5%
	b	条件②、③を満たしている解答(①のみ満たしていない)	0.0%
	c	次のいずれか(①は満たしていても満たしてなくてもよい) 条件②を満たしている解答(③は満たしていない) 条件③を満たしている解答(②は満たしていない)	40.9%
	d	上記以外の解答・無解答	10.6%
問3	a	条件①～⑤のすべてを満たしている解答	15.1%
	b	条件①、③～⑤を満たしている解答(②は満たしていない) 条件②～⑤を満たしている解答(①は満たしていない)	2.4%
	c	条件③～⑤を満たしている解答(①、②は満たしていない) または、次のいずれか(①、②は満たしていてもいなくてもよい) 条件③、④を満たしている解答(⑤は満たしていない) 条件③、⑤を満たしている解答(④は満たしていない) 条件④、⑤を満たしている解答(③は満たしていない)	26.0%
	d	上記以外の解答・無解答	56.5%



③記述問題の自己採点では混乱が予想される

記述問題の成績は、マーク式問題とは別に段階で示されます。問1～3でそれぞれ小問の段階を付け、それをもって記述問題全体の段階を付ける、という流れで決定します。

記述全体の段階ごとの割合

問1 問2	a, a	問3	段階A 14.5%	
	a, b			
	a, c			段階B 14.6%
	b, b			
	a, d			段階C 29.9%
	b, c			
	b, d			段階D 30.8%
	c, c			
	c, d			段階E 10.3%
	d, d			
	d	c	b	a

たとえば、問1の小問の段階がa、問2の小問の段階がb、問3の小問の段階がcだった場合は、記述全体として段階Bということになります。

記述問題自体が難度の高い問題であるだけでなく、段階を付ける作業自体もややこしいため、成績の付け方については事前を知っておき、十分に慣れておく必要があるでしょう。

また、記述問題は成績を付ける前に、解答を自己採点する必要があります。マーク式問題とは大きく異なるため、ここでも慣れていないと混乱するかもしれません。

第2回プレテストでは、受検者による自己採点結果と実際の成績の一致率が報告されました。

受検者自身による解答の確認結果に関する分析

どの問いも約6割が一致、約3割が不一致となっています。例えば、受検者が自己採点で小問の段階をcとしていたが、実際にはaだったという割合はどの問いでも約3割ありました。特に全体の段階に占める比重の大きい問3で2段階のズレが生じると、記述問題全体の成績もズレる可能性が高くなります。そうすると国語全体、さらに共通テスト全体の成績にも大きな影響を与えかねません。

記述問題では、成績の付け方を知るだけでなく、正確に自己採点を行うことも必要になります。実際に問題に解答をするところで練習を終えるのではなく、自分の解答がどのような成績に当たるのかを判断するところまで練習の範囲に加える必要があります。

問	一致		不一致		判断不能	解答不明	
問1	割合		69.4%	30.2%	0.3%	0.1%	
	(判断不能と解答不明を除く)		69.7%	30.3%	-	-	
問1	受検者自身による解答の確認結果						
		a	b	c	d	判断不能	解答不明
	採点結果 a	68.2%	0.9%	26.7%	3.9%	0.3%	0.1%
	b	70.6%	5.9%	17.6%	5.9%	0.0%	0.0%
	c	17.6%	1.6%	73.1%	7.4%	0.2%	0.1%
d	1.7%	0.2%	10.3%	82.9%	2.7%	2.1%	
問2	割合		66.0%	33.4%	0.4%	0.2%	
	(判断不能と解答不明を除く)		66.4%	33.6%	-	-	
問2	受検者自身による解答の確認結果						
		a	b	c	d	判断不能	解答不明
	採点結果 a	63.4%	1.2%	32.3%	2.6%	0.5%	0.1%
	b	75.0%	0.0%	0.0%	0.0%	25.0%	0.0%
	c	20.7%	1.6%	68.2%	9.1%	0.3%	0.2%
d	3.8%	0.7%	24.7%	69.2%	1.0%	0.5%	
問3	割合		70.7%	28.2%	0.7%	0.4%	
	(判断不能と解答不明を除く)		71.5%	28.5%	-	-	
問3	受検者自身による解答の確認結果						
		a	b	c	d	判断不能	解答不明
	採点結果 a	65.7%	1.1%	29.4%	3.2%	0.5%	0.2%
	b	38.7%	26.0%	29.8%	4.7%	0.6%	0.2%
	c	16.4%	3.0%	68.6%	11.3%	0.6%	0.2%
d	2.4%	1.1%	20.0%	75.1%	0.9%	0.5%	



英文校閲者のひとりごと 16

桐原書店の英文校閲担当者（アメリカ出身，在日歴長め）が日本で感じたちょっとしたことをつぶやきます。



Asimov's Vision of Future Education

Recently I stumbled upon a collection of short stories written in the 1950s by legendary science-fiction writer Isaac Asimov. One of the stories was entitled "The Fun They Had." It takes place in the year 2157, two hundred years in the future from 1957. A girl discovers an antique object in the attic of her house called a "book," created during a time when stories were printed on paper. She views this thing as "a waste" since everyone uses a "television screen" which contains a million books or more. Surprisingly, Asimov had already predicted a personal electronic reading device back in the 1950s. Furthermore, the story talks about the outdated concept of "going to school," because in the year 2157, children are taught by a robot "teacher" in the home—there are no "human teachers" anymore, since the robot teacher has more knowledge than any human teacher could possibly have. Every student's educational needs are individually tailored to by the robot teacher. Students are no longer taught the same thing at the same time in a building called a "school." The students, however, envy students of the old days who had fun by interacting with each other at this place. Today, we should be careful to hold on to the face-to-face human communication that Asimov so clearly saw the people of the future stand to lose.



筆者によるイラスト

日本語訳

アシモフが描いた未来の教育

最近、私は SF 界の巨匠アイザック・アシモフによって 1950 年代に書かれた短編小説集を、たまたま読む機会がありました。そうした物語の 1 つには、『昔の楽しみ (The Fun They Had)』* というタイトルが付けられていました。この物語は、(出版された) 1957 年の時点から 200 年後の 2157 年を舞台としています。ある少女が、自宅の屋根裏で 1 つの骨董品を発見しますが、それは物語が紙に印刷されていた時代に作られていた「本」というものでした。少女は、これを「無駄なもの」だと考えます。なぜなら、彼女の時代では誰もが数百万冊以上の本を収録している「テレビ画面」を使っているからです。驚いたことに、アシモフはすでに 1950 年代に個人用の電子ブックリーダー端末の登場を予測していたのです。さらに、この物語は「通学する」という時代遅れの考えにも言及しています。というのも、2157 年には、子どもたちは自宅でロボットの「教師」による授業を受けているからです——もはや「人間の教師」が存在しないのは、ロボット教師のほうが、どんな人間の教師でも太刀打ちできないほどの量の知識を持っているためです。それぞれの生徒が必要とする教育内容は、ロボット教師によって個別に調整されます。生徒は、もはや「学校」と呼ばれる建物で、同じ内容を同時に教えられることはありません。それにもかかわらず、生徒たちは、同じ場所でお互いに交流することを楽しんでいた昔の生徒たちをうらやましく思います。今に生きる私たちは、未来の人たちが失ってしまうかもしれないとアシモフが明察した人間同士の緊密なコミュニケーションを大事にするよう、心を配るべきでしょう。

*SF 小説短編集『地球は空き地いっぱい (Earth Is Room Enough)』(早川文庫) には「楽しみ」というタイトルで収録

